

自著を語る

平凡社ライブラリー

『和本入門―千年生きる書物の世界』

『江戸の本屋と本づくり―続和本入門』

橋口 侯之介

有史以来明治初期までの日本の書物を総称して和本という。明治二十年代、出版界が活版印刷に塗り替わるまで千二百年以上の歴史があった。とりわけ江戸時代の盛んなさまは、想像を絶するほどである。その証拠に今でも古書としてかなりの量が出回っている。その本を手に取りながら、書物の歴史や、様式の変遷、価値の見極め方などを古本屋の立場で案内したのが本書である。

柔らかな和紙でできた和本は、癒し系のオーラを今も出し続けており、伝存の歴史過程を生きたまま内包してくれている。そこから感じとれるものは、本は「読む」という一つの行為のためだけに存在してきたわけではなく、さまざまな属性をいっしょに伴いながら、後世に伝え続けてきたということだった。実物の和本を見ることで、日本人の書物観を目の当たりにするのである。

たとえば、和本の形態は、巻物から始まって、折りたたむ形（折本）、糊で綴じる冊子本、糸でかがる方法へと変遷してきた。それは読みやすく、作りやすく、扱いやすく、残しやすくする工夫でもあった。江戸時代にもっとも普及したのは袋綴じと呼ばれる冊子の装訂だが、同時にこのどの歴史的な形をも併存していた。物語の時空表現には巻物が向いており、お経は折本で読み、江戸の町を見るなら二畳分に貼り合わせた地図がよく、嫁入り道具は優雅な中世風の糸綴じ本がよい、などその内容や機能のために分化していた。

さらに、メディアとしての存在価値は、手書きの本（写本）でも十分な役割を果たしていた。『源氏物語』が千年の命脈を保ってきたのは、この写本の力であ

る。江戸時代になっても写本は、重要な媒体として働いていた。

和本は歴史的伝統の様式を残す一方、こうした多様性や工夫のための新たな試みも受け入れる懐の広さがあったのである。

今、電子書籍化が進もうとしている。そこでよく聞かれるフレーズに「グーテンベルク以来の変革」というのがあるが、もともと日本における歴史と、本とは何か、という根源まで探れば、それはあてはまらないことに気づくだろう。

アジアではグーテンベルクと関係なしに書籍は進展してきた。グーテンベルクより数百年早い宋代（十世紀後半から三百年間）には木版印刷が盛んになり、書肆で本が売られるようになっていた。韓国でもヨーロッパよりずっと早くに活字印刷が行われていた。日本でも平安時代には経典の印刷が始まっている。

江戸時代に入って、活字印刷の方法では漢字や振り仮名のある文字表現に向いていないことを悟り、木版による精緻な印刷を発展させた。以来、二百六十年間、独自に「進化」を続けて、豊饒な書物文化を形成したのだった。

電子化の本当の意義は、多様性を生かした知識の複合化にある。それは過去の清算でなく、新たな組み立てである。そのときに、ぜひ拙著を読んで、この和本から見た書物の根源、本質を読み取ってほしい。むしろ、そこに新鮮な視点が浮かびあがるだろう。

「週刊読書人」二〇二二年八月三日号